

大腸疾患に対する可視総合光線療法

(大腸ガン、大腸ポリープ、大腸憩室症)

一般財団法人 光線研究所
所長 医学博士 黒田 一明

大腸疾患には腫瘍、免疫異常、感染症によるものなど多くの種類があります。平成30年の国立がん研究センターのガン統計予測によると、部位別では男女合計で大腸ガンが胃ガンを抜き十五万二千百人と最多で、男女とも二番目に多いガンです。一方、死亡数予測では大腸ガンは肺ガンに次ぎ二番目に多く五万三千五百人と予測されています。大腸ガンを含む消化管ガンは全ガンの約30%を占め、消化管ガンに対する予防や治療が重要であることが分かります。

可視総合光線療法はガンの一次、二次、三次、四次予防、治療に幅広く対応することができます。今回は大腸ガン、大腸ポリープ、大腸憩室症について文献紹介と光線治療例を解説します。

■可視総合光線療法

光線療法は大腸ガンや大腸ポリープなどの悪性、良性の腫瘍性疾患に対しては光と熱エネルギーを補給して抗腫瘍作用を発揮します。この作用を支えるためには光線療法により体温や血行の改善、ビタミンD産生、カルシウム代謝是正などの作用を促し、免疫機能を強化することが重要となります。

大腸ガンは手術が基本的治療となりますが、その術前術後に光線療法を行うと術後の体力回復、傷の治癒促進、痛みの軽減や抗ガン剤の副作用を減らす作用など有益な作用が期待できます。手術後にガンの再発や転移がある場合やガンが進行した場合にも光線療法はガンの進行を抑え食欲を促し、体力の維持、痛みの軽減など日常生活の改善に利用できます。

大腸ポリープは高齢化に伴い増加しており、ポリープはガン化する例が意外に多いと指摘されています。光線療法の光と熱エネルギー補給、ビタミンD産生など抗腫瘍作用が大腸ポリープの発生予防や治療に利用できます。

大腸憩室症も加齢とともに増加しています。大腸憩室に炎症がなければ治療の必要はありませんが、食事の偏りや便秘などにより憩室に炎症が起きることがあります。憩室炎になると痛み、出血、膿瘍形成、腸壁穿孔などの合併症が生じ外科的治療が必要になることがあります。以前から憩室炎を起こす患者はビタミンD不足や日に当たることが少ないことが指摘され、ビタミンD不足が免疫力を低下させて憩室炎を起こすと考えられます。光線療法はビタミンD不足を解消して憩室炎の予防、治療に役立ちます。大腸ガン、大腸ポリープ、大腸憩室炎は再発を繰り返しやすいので日頃から食養生の生活習慣改善と光線療法の定期的継続が重要となります。

◆治療用カーボン・照射部位・時間

★大腸ガン、大腸ポリープ

1000-5000 番、
1000-4008 番、
1000-3001 番など

★大腸憩室炎

3001-5000 番、
3001-4008 番、
1000-3001 番など

全身照射

⑦①②⑤⑥各5~10 分間、③5分間または④各5分間照射

局所照射

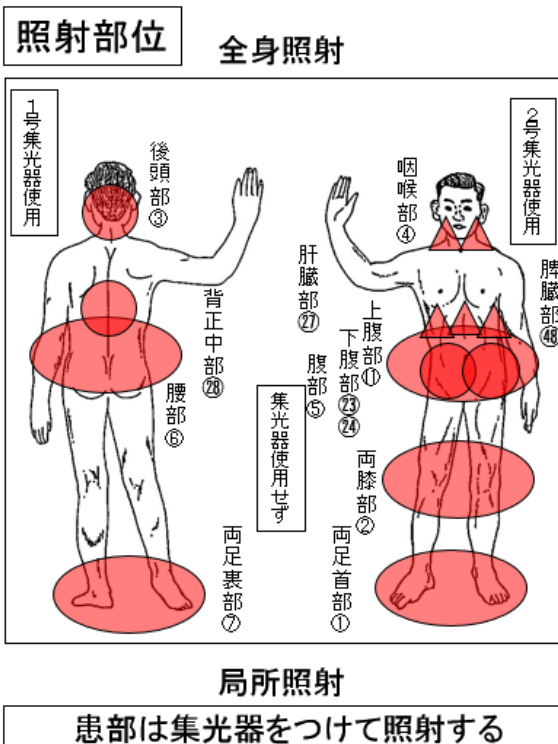
その他病態に合わせて背正中部⑳、左右下腹部㉓⑳、上腹部①①、肝臓部㉗㉗、脾臓部④④など局所に集光器を使用し照射します。痛みには 3001-4008 番、1000-3001 番などを使って痛む部位に集光器をつけて照射します。時間は 30~60 分と長めに照射。

■血中ビタミンD濃度とガン罹患リスクの関連（日本の研究、2018 年）

人を対象とした研究で、血中ビタミンD濃度が上昇すると、大腸ガンや肺ガンに罹患するリスクが低下する傾向が観察されている。しかし、ガン全体を対象とした研究はまだ十分ではない。そこで、日本人を対象とした大規模研究において、血中ビタミンD濃度とガン罹患リスクとの関連を調査した。研究に参加した 40~69 歳の男女約三万四千人を対象に、19 年間の追跡調査で三千七百人にガンが確認された。ガンに罹患しなかった四千四百人を対照とし、血中ビタミンD濃度とガン罹患リスクの関連を検討した。その結果、血中ビタミンD濃度が最も低い群を基準にすると、血中ビタミンD濃度が2番目に低い群は何らかのガンに罹患するリスクが 20%低下し、血中ビタミンD濃度が2番目に高い群では 25%と最もリスクが低下した。以上、ビタミンDにはガンの発生を抑える作用があることが示唆された。

■血中ビタミンD濃度とガン死亡率の関連（英国の研究、2017 年）

高い血中ビタミンD濃度はガンの予後に影響を与えていると言われている。今回、64 本の論文をまとめて分析し、血中ビタミンD濃度とガンの予後の関連を検討した。結果、血中ビタミンD濃度が高いと死亡率は、乳ガンで 25%、血液腫瘍で 41%、大腸直腸ガンで 25%、頭頸ガンで 21%、前立腺ガンで 16%、皮膚ガンで 36%それぞれ低下することが示された。さらに、血中ビタミンD濃度が高いと、進行性ガンの死亡率は 16%低下することも判明した。以上から、血中ビタミンD濃度が高いと、ガンの予後がよりよい結果となる可能性が示唆された。



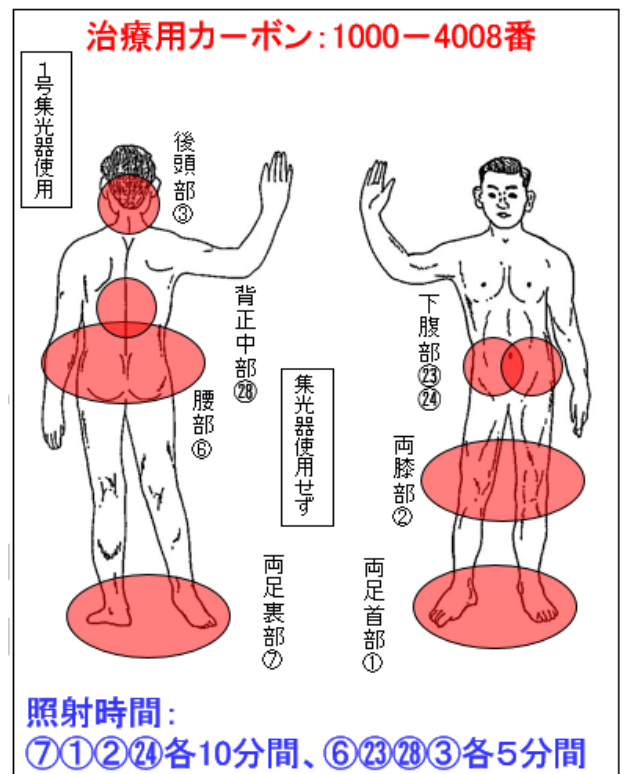
大腸憩室症について光線療法は憩室自体を治すことはできません。

【治療例】大腸ガン術後 57歳 女性 主婦 身長 157.2cm 体重 62.8kg

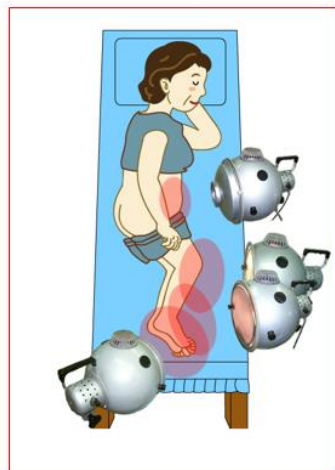
症状の経過：50歳時、腹痛、発熱が続き体重が3kg減り、検査を受けたが特に異常がなかった。その後体調がよかったが、4カ月後、嘔吐がみられるようになり、詳しい検査を受けたところ上行結腸ガン、腸閉塞と診断され緊急の手術を受けた。ステージはⅡであったが、ガンは一部腸壁まで浸潤しており腹膜への浸潤の可能性があった。退院後はガン再発の不安がありその予防のため友人の勧めで当附属診療所を受診した。

治療の経過：自宅で毎日治療した。光線治療で体調は徐々に回復し、手術の傷はきれいになり痛みもなくなった。治療1カ月後、抗ガン剤の治療を勧められたが断った。治療2カ月後、食欲、便通、睡眠はよく体重が6kg増えた。治療3カ月後、貧血が改善した。治療1年後、光線治療で体調はよく術後の検査は異常なかった。治療2年後、CT検査、大腸内視鏡検査など再発はなく順調な経過であった。

治療7年後の現在、ガンの再発はなく体調はよく、光線治療は週に2～3回続けている。



1回目
⑦①②④各15分間



2回目
⑥②③⑧各15分間



■血中ビタミンD濃度と大腸ポリープの関連（韓国の研究、2011年）

血中ビタミンD濃度と大腸ポリープの関係をみるため、9本の論文をまとめて検討した（大腸ポリープ患者3398人、ポリープのない対照者3883人）。血中ビタミンD濃度が10ng/ml 増えるごとに大腸ポリープのリスクは7%低下、20ng/ml 増えるごとに16%低下した。血中ビタミンD濃度が最も高い群は最も低い群に比べ大腸ポリープのリスクは27%低下した。以上から、血中ビタミンD濃度が高いと大腸ポリープの発生リスクを低下させることが示唆された。

【治療例】大腸ポリープ 67歳 男性 会社役員 身長 165.0cm 体重 58.3kg

症状の経過：元々胃腸が弱く売薬を服用していた。50歳頃から仕事が忙しくなり胃の調子が悪かった。52歳時の健診で胃潰瘍の跡、ピロリ菌陽性を指摘され投薬で除菌した。その後も胃が気になることが多かった。55歳時、胃潰瘍を光線治療で治した友人より光線治療を勧められ当附属診療所を受診した。

治療の経過：自宅で週に1~2回治療した。58歳時、健診で大腸ポリープが2個(1cm、0.8mm)発見され内視鏡で切除した。その後は1000-4008番に変更し週に1~3回治療した。60歳時の健診では大腸ポリープが1個(1.3mm)あり内視鏡で切除したが、組織検査はガンと診断された。小さいポリープが2個あったが様子を見ることになった。光線治療の回数を週に4~5回に増やした。その後の検査で小さいポリープは消失し、大きいポリープの切除後の再発はなかった。光線治療で便通、睡眠は良好であった。

67歳の現在、大腸ポリープの再発はなく体調はよく元気に仕事を続けている。

治療用カーボン: 3001-4008番
1000-4008番

1号集光器使用

後頭部①

背正中部②

腰部③

両足裏部⑤

集光器使用せず

腹部⑥

両膝部⑦

照射時間:
⑦②③各10分間、⑤⑥③各5分間

■血中ビタミンD濃度と大腸憩室炎との関連 (米国の研究、2013年)

最近の研究で、大腸憩室炎による入院には地理的、季節的変動があることが報告されている。そこで血中ビタミンD濃度と大腸憩室炎の関係を合併症のない大腸憩室患者九千人、入院治療が必要となる可能性がある大腸憩室炎患者九百人を対象に検討した。その結果、大腸憩室炎患者の血中ビタミンD濃度は平均 25.3ng/ml で炎症のない大腸憩室患者の濃度 29.1ng/ml より低いことが示された。さらに、膿瘍を合併する患者や緊急手術が必要となる重症の大腸憩室炎患者では血中ビタミンD濃度が炎症のない患者より低いことも判明した。以上から、血中ビタミンD濃度が低いと憩室に炎症が起こりやすいこと、血中ビタミンD濃度が高いと憩室炎による合併症リスクを低下させることが示唆された。

【治療例】大腸憩室炎 77歳 男性 会社役員 身長 177.8cm 体重 65.0kg

症状の経過：60歳頃から腹痛が時々あり、痛みは排便すると楽になっていた。検査では異常がなかった。その後も腹痛があったが長く続くことはなかった。67歳時、腹痛が徐々に強くなり腹部膨満感、吐き気も出てきたので検査を受けたところ腸閉塞の診断を受け手術を受けた。その際大腸憩室が15個あり、その炎症が腸閉塞の原因ではないかと言われた。退院後、大腸憩室炎の再発予防のため親戚より光線治療を勧められ当附属診療所を受診した。

治療の経過：自宅で毎日治療した。腸閉塞予防のため下剤を服用していたが便通は2~3日に1回であった。治療1カ月後、足裏や腹が温まり便通が毎日みられるようになった。治療1年後、強い腹痛のため入院した。腸閉塞であったが、点滴、腸洗浄で改善した。過食や飲み過ぎで腹痛が出ることもあったが光線照射、とくに③の照射（30分間）で楽になっていた。

治療10年後の現在、光線治療で憩室炎の再発はなく、体調はよい。

